

平成9年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告

1. 調査期間 平成10年2月3日（火）～平成10年3月27日（金）

2. 調査古墳 第5号古墳・第6号古墳

それぞれ6本づつのトレンチを設定した。

3. 調査概要 第5号古墳

調査の結果、6本のトレンチ全てから墳丘斜面に施された葺石を、T5-1及びT5-4～6から周溝と考えられる溝を検出した。葺石の範囲は、水平距離で幅約1m、高さ約0.5mで、人頭大よりもやや小降りの礫を5～6段程度斜面にそって敷き並べていた。その最下段部は、確認のできなかったT5-3以外では、礫を2段積みしており、上記の周溝の底部直上面にこの礫が配置されていることから、この礫をもって本古墳の墳端とみなした。

この結果、本古墳の推定される規模・墳形は直径約12mの円墳となる。墳丘の高さは、北側に設定したT5-1では約1.5m、南側に設定したT5-4では約1mで、北側が若干高くなる傾向を示す。周溝は上記のように西半部に設定した4箇所のトレンチにおいて確認された。周溝の規模は南側に設定したT5-4及び西側に設定したT5-6では幅約1m、深さ約0.5mであるが、北側に設定したT5-1では幅約3m、深さ約0.5mとなることから周溝については南側が狭く、北側にいくにしたがって幅広となる傾向にあると推定された。ところでこの周溝は東半部のトレンチのうち、T5-2では確認できておらず、全周していなかった可能性もある。

なお、T5-1及びT5-2では、その墳端から幅約1mの犬走り状の平坦面と葺石最下段部と平行に巡る列石が確認され、またT5-6でも列石は認められなかったものの同様な平坦部が確認されたことから、少なくとも本古墳の西半部に列石を伴う何らかの外表施設が存在した可能性も考えられる。

周溝などからの古墳にともなう遺物の出土はない。

第6号古墳

各トレンチの調査の結果、最も遺存状況が良好だったのは、西斜面に設定したT6-5、6である。これらのトレンチでは、墳丘斜面上において、やや大型の平石を2～3段広口積みにしたり、あるいは大型の平石を立てならべた、いわゆる立石状の施設を、上・中・下3段にわたって確認している。これらの立石状施設の上方にはそれぞれやや小振りな礫を使用して葺石が施され、その施設の前面には幅が狭いながらも平坦面が形成されていた。また、これらの内の下段の立石状施設については、その前面約1m西あたりから徐々に傾斜が強くなり、そのまま丘陵斜面につながっていることから、この下段の立石状施設をもって本古墳の墳端とみなした。

さて、他のトレンチにおいては、上述した立石状施設がそれぞれ2段づしか確認しえなかった。これらのトレンチで確認した立石状施設と上述の3段に施された立石状施設との関

係を標高などを手掛かりとして考察すれば、T 6 - 1で確認された施設は上段及び下段に、T 6 - 2～4で確認された施設は中段及び下段に、それぞれ対応するものと考えられる。なお、T 6 - 1については、中段の施設が後世に削平を受けたために消失しているものと考えられ、T 6 - 2～4においても上段の施設が消失している可能性が高い。

この結果、規模、形状は直径約23mの円墳であり、外表施設として、葺石が施され、3段の立石状の施設をともなう3段築成の古墳であることが推定された。なお、設置したトレーニチにおける葺石の遺存状況からいえば、墳丘西側の葺石がより丁寧に施されており、本古墳の築造にあたって西方を意識している可能性も考えられる。墳丘の高さは西側に設定したT 6 - 5において最も高く約4mで、また北側に設置したT 6 - 1で約3.5m、南側に設定したT 6 - 4では約2.8mである。このことから尾根筋上はやや低く、斜面側は高くなっている。ところで、北側に設置したT 6 - 1において、幅約4m、深さ約1.1mの溝が確認され、堀切状の溝と想定される。なお確認できなかったが、地形観察の結果、南側にも同様な堀切状の溝が存在する可能性は高い。

本古墳にともなう遺物の出土はない。

新たに確認された古墳（第13号古墳）

T 5 - 5では、第5号古墳周溝掘り方から南西2mと4mの位置に石棺墓と土壙墓を1基づつ確認した。また本トレーニチ及びT 5 - 6においてはそれぞれ約0.9mと約0.7mの段差の地山削り込み痕跡が認められ、またT 6 - 1においては第6号古墳の溝の堆積土を約0.6m掘り込んでいることが土層観察によって確認された。この地山ないしは溝堆積土の削り込みとT 5 - 5で検出した第5号古墳周溝のラインを結ぶと、上述した埋葬施設を中心として方形に地山形成された墳丘が想定でき、従来未確認の方墳1基の存在が推定された。規模は長さ約10m、幅約7m、高さは確認しうる範囲で約1.2m程度である。

弥生時代の遺構

T 5 - 1では西端から約2～6mの範囲に住居跡が1軒確認された。またT 5 - 3では既に崖面に露頭して確認されていた貝塚が、良好に遺存していることも確認できた。

設定した各トレーニチ及び各遺構内から弥生時代後期と思われる土器片が出土しているが、細片のため図示するにいたらなかった。

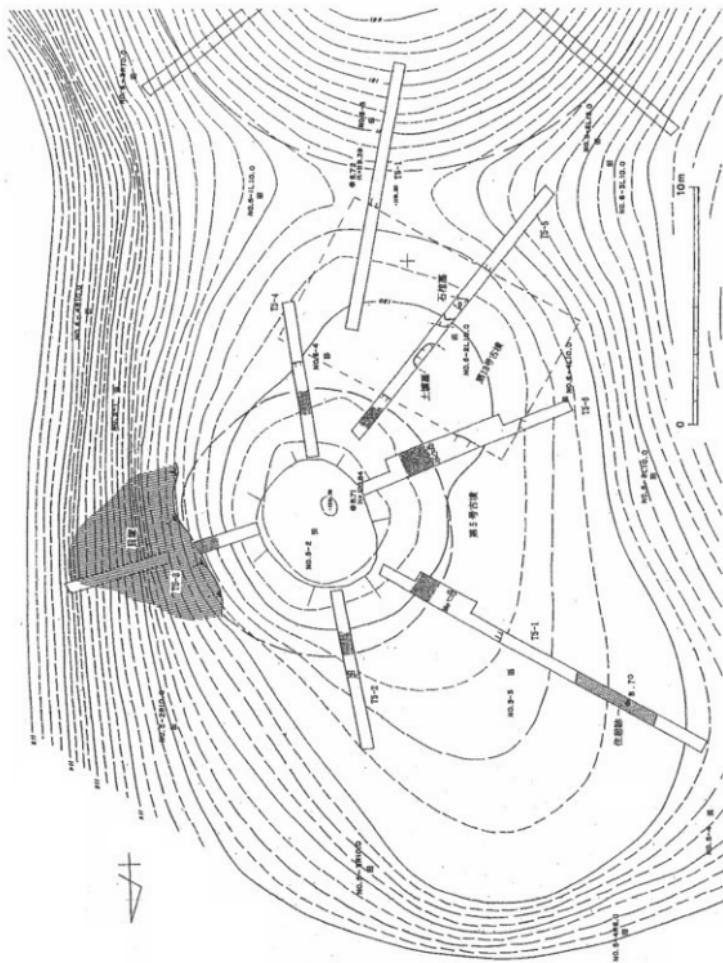
各古墳の築造順序

いずれの古墳においても、古墳に伴う遺物の出土はない。

なお、各古墳の築造順序は、土層観察や各古墳の立地関係などから、第6号古墳→第13号古墳→第5号古墳の順序で築造されたと考えられる。また、第7号古墳と第6号古墳の新旧関係については、T 6 - 4の土層の堆積状況から第7号古墳が新しい可能性が高い。

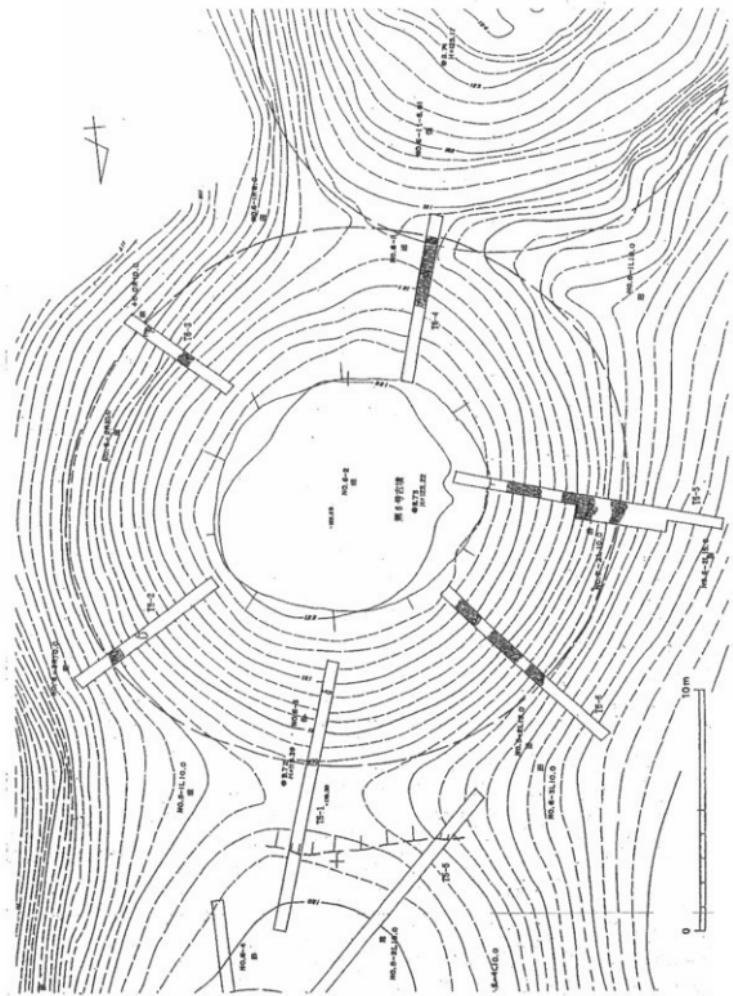
※ 網目は葺石箇所

第5号古墳 ($S = 1 : 200$)



※ 網目は葺石箇所

第6号古墳 ($S = 1 : 200$)



平成10年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告

1. 調査期間 平成11年2月15日（月）～平成11年3月30日（火）

2. 調査古墳 第4号古墳

地形測量によって推定された墳形に沿って、第2図のとおり、5本のトレントを設定した。

なお、南側に確認された平坦面上においても、遺構確認を目的として4本のトレントを設定した。

なお、トレントの呼称は、第4号古墳に設定したトレントは「T4-○」、また南側平坦面上に設定したトレントは「T-○」とし、○に挿入する数字は通し番号とした。すなわち、前者はT4-1～5、後者はT-6～9である。

3. 調査概要 第4号古墳

I 墳形と規模

墳形（推定墳形：帆立貝式古墳、推定規模：全長約26m、後円部直径約18m、突出部長さ約8m・幅約10m）及び規模を確認するため、墳丘頂部にT4-1を、くびれ部にT4-3を、突出部にT4-4を設定した。また、東西両斜面にそれぞれT4-5、T4-2を設定した。

調査の結果、T4-1では、北半部において第4号古墳に伴うと考えられる埋葬主体部を確認した。しかしながら、その深さ（5～40cm）が示すとおり、墳頂部は「中世の郭の築造によって」削平を受けていた。そのため、1980年における報告書（潮見浩編『中小田古墳群』広島大学文学部考古学研究室・広島市教育委員会）において「中世の郭の築造によって埋め立てられたと推定され」た第4号古墳墳丘南端部については、確認できなかった。

一方、T4-3、T4-4では中世山城跡に関連する堀切跡が確認されたため、この2本のトレントでは突出部については確認できなかった。また、T4-2、T4-5においては外表施設等は認められなかったが、墳頂平坦面端から、それぞれ約2.5m、約2.0m下の位置で傾斜変換点が確認された。墳頂部が大幅に削平を受けていたこともあり、これについても本古墳に伴うのかどうかは不明である。

以上のことから、第4号古墳の築造後、中世段階における山城築造等によって本古墳周辺の地形の改変が行なわれたという結論にいたった。特に突出部については堀切によって、後円部についても「郭の築造」によって、かなり削平されている。そのため、本古墳の墳形及び規模の詳細については明確にし得なかったが、T4-2、T4-5において確認した傾斜変換点が本古墳の墳端を示しているとすれば、後円部の規模は直径約16mである。

II 埋葬施設

T4-1の北半部において第4号古墳に伴う埋葬施設と考えられる平面形態が長

方形を呈する墓壙を確認した。なお、この埋葬主体部は、当初その一部のみの確認であったので、その性格を把握するため、拡張して調査を実施したものである。

埋葬主体部（SK 1とする）の掘り方は、長さ約2.8 m、幅は北側は約1.2 m、南側は約1.4 mである。深さは南側は約40 cm、北側は約5 cmである。土層観察により、長さ170 cm幅65 cmの木棺がほぼ中央に納められていることが確認できた。墓壙内からは鉄製品が出土した。

鉄製品は北側掘り方から南へ約60 cmの位置において、北側掘り方にに対して平行、すなわち墓壙主軸方向に直交する状態で鉄剣と袋状鉄斧が並んで出土した。これらの鉄製品の出土状況は、剣は切先側を西側にして刃を立て、鉄斧は刃部を東側に向け、あたかも立てたような状態で出土した。土層観察及びこの出土状況から、これらは木棺内に副葬品として木棺小口に立てかけて副葬されたと考えられる。ちなみに、埋葬頭位方向は墓壙床面の高低差からいえば北側が高く、北頭位であったと推定される。つまり、鉄製品は頭部付近に置かれていたのであろう。

III 出土遺物

本古墳に伴う遺物としては、上記鉄製品のみである。そのほかでは、T 4-5の覆土中から須恵器片（第4図3）1点が出土しており、本古墳に伴うものと考えられる。

- ・ 鉄 剣（第4図1） 全長18.4 cm、茎部2.1 cm、刃幅最大1.8 cm、茎幅1.1 cm、剣身両面中央部に鈕が認められる。茎部に目釘穴が一個穿たれている。重量は284.6 gである。
- ・ 鉄 斧（第4図2） いわゆる袋状を呈する。全長6.9 cm、刃部幅3.6 cm、袋部厚さ1.4 cm、幅3 cmである。重量は388.0 gである。
- ・ 須恵器（第4図3） 豊の破片と考えられる。内外面とも丁寧にスリ消しが施されている。色調は内外面とも黒灰色を呈し、胎土は精緻、焼成は良好である。

IV 築造時期

T 4-5出土須恵器片が本古墳に伴とした場合、その外面は丁寧にスリ消しているなど古式須恵器の様相を呈していることから、5世紀中葉を前後する時期が推定される。そのことから、本古墳についてもほぼこの時期の築造と想定される。

その他の遺構

I 中世

前述のとおり、第4号古墳築造後中世段階において、墳頂部は南北約14 m、東西約9 mの郭の築造によって削平されていることが確認された。

そのほか、中世における山城跡関連の遺構は、T 4-3、4から堀切跡が二条、またT-6から三条の敵状堀跡が確認された。

郭の北側、T 4-3、4において確認した堀切跡のうち、南側の堀切跡は土層観察によれば、意図的に埋め立てられていることから、恐らくは当初郭北側裾に幅約3 m深さ0.7～2 mの堀切を掘り、そのご、この堀切を埋め立て幅約3.8 mの郭状の平坦面を形成して、その北側に再度堀切が穿かれていることが確認された。

また郭の南側、T-6で確認された三条の畝状堅堀跡は、南からそれぞれ幅約2 m深さ約0.7 m、幅約1.4 m深さ約0.8 m、幅約2.8 m深さ約1.3 mの規模で、最も北側の堅堀は断面形態が箱薙研形状を呈している。また、地形観察によれば、この畝状堅堀跡のいずれもが、西側斜面まで続いていることがその痕跡から確認することができる。

II 弥生時代

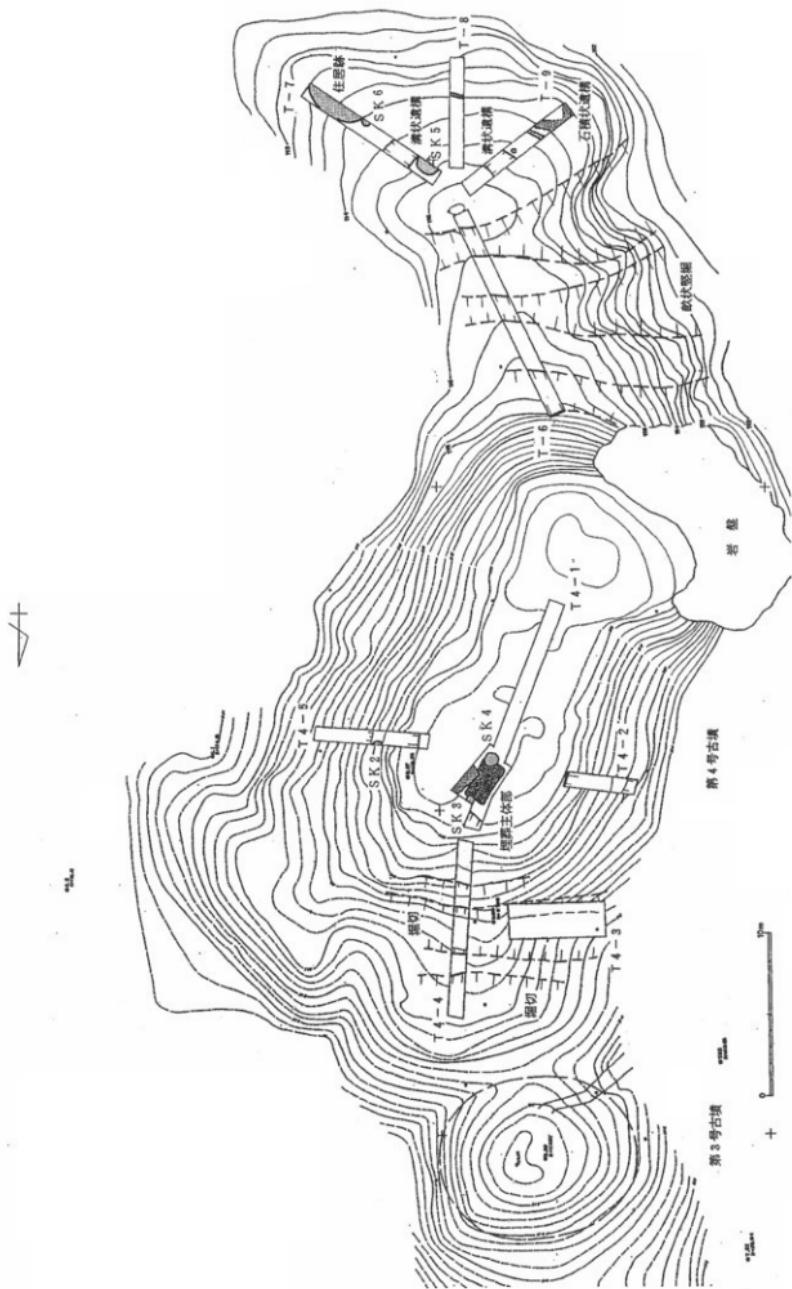
T-7からは、弥生時代のものと考えられる土坑（SK5）と竪穴住居跡（SH1）をそれぞれ一基づつ確認した。SK5の規模は、直径約1.4 m深さ0.5 mである。SH1については円形プランを確認しただけであるが、その形状や遺物の出土などから竪穴住居跡と判断した。それぞれ、埋土中及び確認面からは弥生土器片（第4図4～7）が出土している。その特徴からいずれも後期段階と考えられ、遺構もほぼ同時期と推定される。

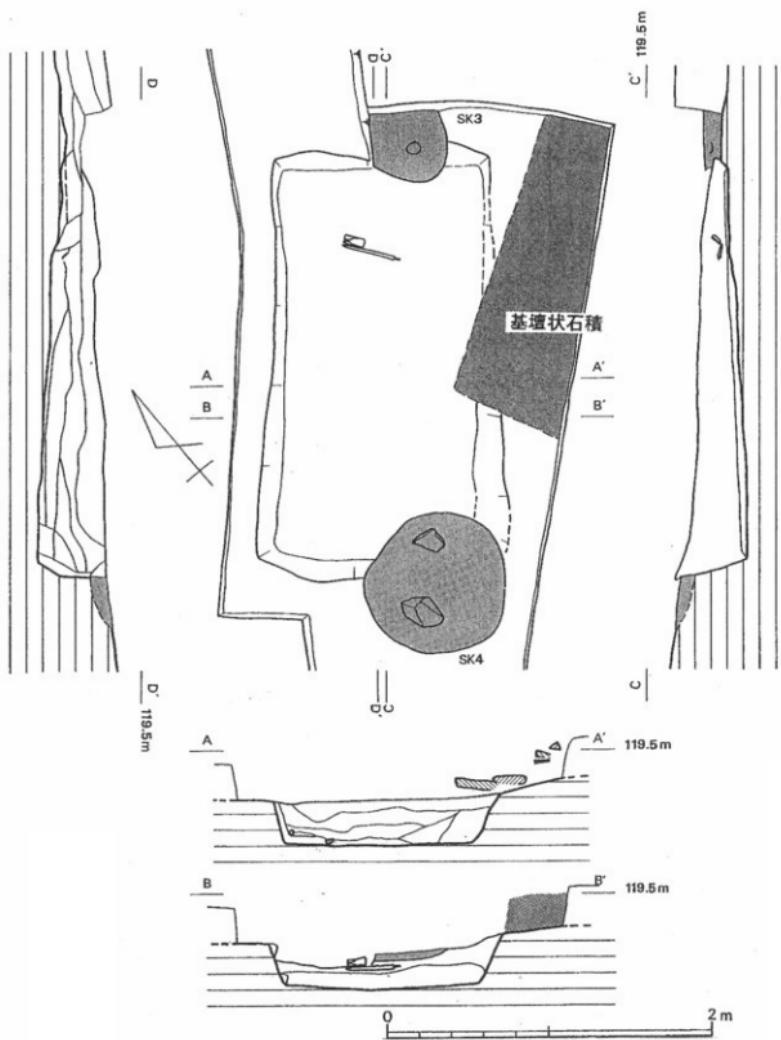
III 時期不明の遺構

時期及び性格不明の遺構には、T4-1から土坑（SK3、SK4）2基、基壇状の石積み遺構、T-9から石積み遺構、溝状遺構、T-7から溝状遺構などがある。

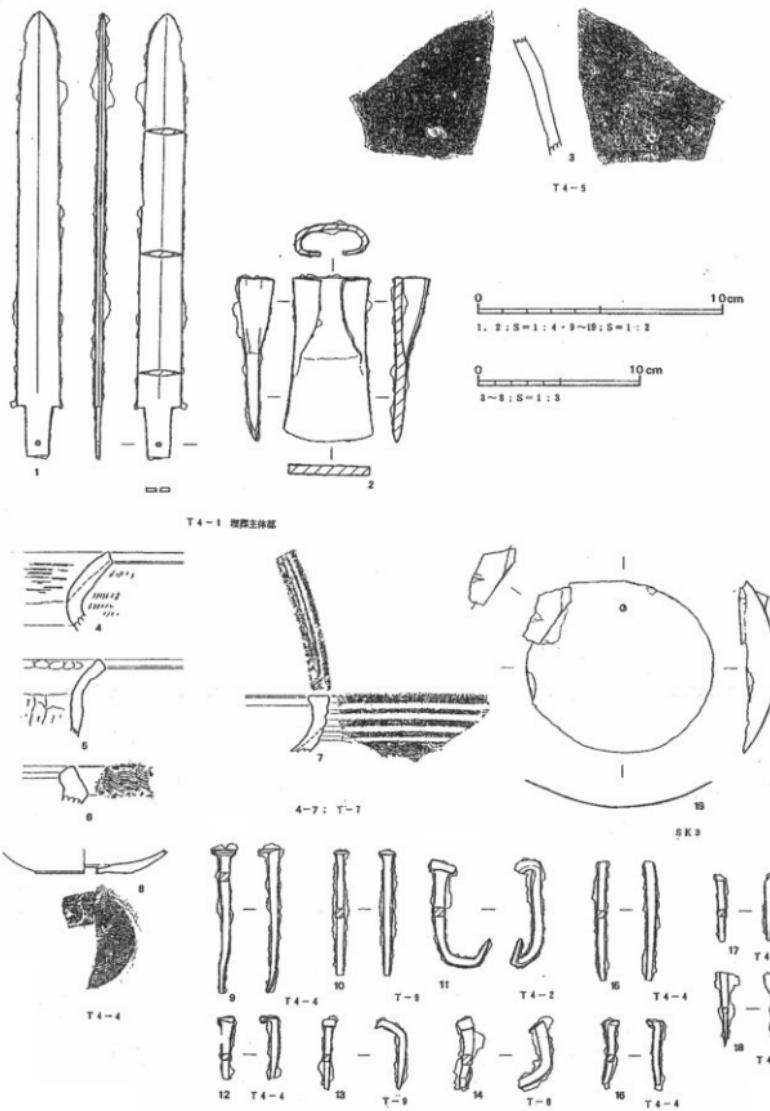
このうち、SK3は規模が直径約0.5 mの土坑で、その中央から椀状の銅製品（第4図19）が出土しているものの時期を確定できていない。同トレンチで確認された基壇状の石積み遺構は南西隅を確認するにとどまっているが、現状で東西約0.8 m以上、南北約2 m以上の規模である。覆土中からは近世代と考えられる瓦の破片が見つかっており、この時期の墳墓の基壇の可能性が高い。T-7の溝状遺構は幅1.8 m深さ0.4～0.6 mの規模で、T-9でもほぼ同規模の幅約1.6 mの溝状遺構を確認した。このうちT-7の溝状遺構の埋土中から弥生土器片が出土している。この両トレンチで確認した溝状遺構の関連を把握するため、T-8を設定したものの、溝状遺構は確認できなかったため、時期、性格とも不明である。

第2図 平成10年度発掘調査トレンチ配置図 (S = 1 : 300)





第3図 中小田第4号古墳埋葬施設実測図 ($S = 1 : 30$)



第4図 平成10年度発掘調査出土遺物

平成11年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告

1. 調査期間 平成12年2月28日（月）～平成12年3月30日（火）

2. 調査古墳 第3号古墳（第2図）

地形測量によって推定された墳形に沿って、5本のトレントを設定した。

なお、トレントの呼称は、第3号古墳に設定したトレントは「T 3 - ○」とし、○に挿入する数字は通し番号とした。すなわち、T 3 - 1～5である。

3. 調査概要 第3号古墳

I 墳形と規模

墳形（推定墳形：円墳）及び規模（推定規模：直径東西12.5m・南北11m、高さ2m）を確認するため、現状地形で墳丘頂部と見なされる平坦面を除いて、丘陵尾根の主軸にはほぼ平行方向にT 3 - 1、T 3 - 3を、またほぼ直交方向にT 3 - 2、T 3 - 4を設定した。その他にT 3 - 3とT 3 - 4との間、すなわち北東方向にT 3 - 5を補足的に設定した。

調査の結果、T 3 - 1から現状地形で墳丘斜面と見なされる箇所、トレント北端から2.5m南までの範囲において埋葬施設を確認した。ただし、その以南はT 3 - 1のほぼ中央で確認された幅約4m、深さ約1mの二段掘りの溝状遺構によって削られ、また残存部についても半壊状態であった。

この溝状遺構は、その埋土中からは時代を確定できる遺物は出土していないが、その南に隣接する第4号古墳の立地する丘陵は中世段階に山城の主郭として利用されていること、また平成11年度に発掘調査を実施した第4号古墳北側で確認した掘切跡にはほぼ平行していること、そして土層断面の観察などの状況から見て、中世段階の堀切跡と考えられる。すなわち、本来このトレントで確認した埋葬施設を主体とする第3号古墳が造られたのち、中世段階に山城築造に伴う堀切の掘削によってその南面部が削られたものと推定された。

そのことから、本古墳の現地形は、中世段階以降に改変されたため、本来の形状を留めておらず地形観察のみでは本古墳の墳形及び規模の推定は困難が生じた。

T 3 - 2では、幅約50cmの溝を伴う傾斜の変換点を確認した。その溝の埋土から土器片を確認したものの、細片のため時期の確定はできなかったため、本古墳に伴うかどうか不明である。T 3 - 3では、北側斜面において、本古墳に伴うと考えられる傾斜変換点は確認できなかった。北側に築造された第2号古墳との間には溝が確認された。しかし、本トレントの土層観察によれば、トレント内の土砂の堆積状況はT 3 - 1の堆積状況と類似しており、この本古墳と第2号古墳との間においても、中世山城築造に伴う堀切が存在した可能性はある。なお、T 3 - 4及びT 3 - 5では、明確な墳丘の盛土らしき存在を確認しえなかった。

以上のことから、第3号古墳の築造後、中世段階における山城築造が行われていたため、第3号古墳の範囲については明確にしえなかった。

ところで、T 3-1 では、土層観察によると、人工的な堆積状況を呈する土層（第4図網目箇所）が確認された。またその南側の炭まじりの堆積土については、前述の人工的な土層と地山とで形成される溝状を呈する地形に水平に堆積しており、後述する主体部との位置関係から、これらの土層が第3号古墳の墳丘残土及び南側周溝内堆積土と判断された。その場合、この人工的な土層の南端が本古墳の南側墳端と見なしてよいであろう。後述の埋葬施設が墳丘のほぼ中央に構築されているとすれば、本古墳の規模は直径ないし一辺約13mと推定することができる。なお、T 3-2 で確認した時期不明の傾斜変換点については、本古墳に伴うとした場合、先の想定とは合わせず短くなるため、恐らく他の時代のものであろう。

II 埋葬施設（第3図）

T 3-1 において第3号古墳に伴う埋葬施設を確認した。中世山城跡に伴う堀切跡によって半壌状態であるが、ほぼ南北に構築された竪穴式石室である。

前述したとおり、南半部は損失しており、遺存した箇所も半壌状態である。遺存した石室の状況から、側壁は根石を含む基底部のみの遺存と考えられるが、東西両側壁とも比較的平らな疊を積み上げた長手積みにしていた。北側小口については、根石は石材を立てて使用して、その上の積み石は長手積みにしており、側壁とは積み方を異にしている。石室床面には疊は敷いていなかったが、棺台石と考えられる礫が認められた。また、北小口及び東西両側壁には人頭大の礫を使用して控積みも認められた。

床面における疊の有無という相違が認められるが、石室の構造については第2号古墳の石室の構造と類似しており、両古墳の被葬者の関連も予想される。

石室の内法は長さ現状で約1.36m、幅は北側は約0.5mである。高さは現状で最大約50cmである。石室の主軸はN19°Wである。

石室床面から原位置で出土した遺物は鉄剣及びその下方から出土した不明鉄製品の2点である。そのほかは、鉄鐵が石室埋土中ないしは堀切掘削土中から出土している。鉄剣は北側小口から南へ約50cmの位置で、中心軸からやや東側よりに、南に切先を向け、ほぼ刃を床面に水平にして置かれていた。茎部は根元1/3の箇所で分離していた。関から北約90cmの位置で、この鉄剣の直下に不明製品を確認している。ちなみに、埋葬頭位方向は鉄剣の切先方向から北頭位であったと推定される。

III 出土遺物（第5図）

本古墳に伴う遺物としては、上記鉄製品のみである。そのほかでは、各トレンチで土師器や須恵器が出土しているが、細片であり、また埋土中であることから、本古墳に伴うかどうか不明である。

・ 鉄剣（第5図1） 全長78.8cm、刃部60.6cm、刃幅3.8cm、茎最大幅3.2cm、剣身断面は凸レンズ状を呈し、鏃はない。茎部に目釘穴が二個穿たれている。重量は606.6gである。

・ 鉄鎌（第5図3～11） 全て長頸鎌系で、両刃造りである9を除きすべて片刃造りである。後者は逆刺を有する。ほとんどが破

損しており、大きさは不明である。10・11は鐵の茎と考えられる（＊は現状数値）。

- 3 全長14.0cm, 刃部長1.9 cm, 重量15.3 g
- 4 全長12.9cm, 刃部長2.7 cm, 重量10.7 g
- 5 全長11.9* cm, 刃部長3.1 cm, 重量10.7 g
- 6 全長11.7* cm, 刃部長3.3 cm, 重量10.5 g
- 7 全長11.5* cm, 刃部長3.1* cm, 重量11.4 g
- 8 全長11.5* cm, 刃部長3.4 cm, 重量9.9 g
- 9 全長7.4* cm, 刃部長2.2 cm, 重量6.2 g

不明製品（第5図2） 全長7.8 cm, 幅0.8 cmの湾曲した長方形状を呈し、片側中央は約幅4 cm程度、刃状に薄くなっている。重量は4.2 gと軽い。

IV 築造時期

本古墳の築造時期については、土器からは判断できないため、埋葬施設やその石室内外から出土した鉄製品から見て、第2号古墳に近似した時期に築造されたと考えられる。第2号古墳は竪穴式石室内外から素紋鏡、衝角付冑、三角板銛留短甲、鉄劍、鉄刀、鐵鎌などの多量の鉄製品が出土している。須恵器の出土は認められなかつたが、副葬品の組み合わせから5世紀中葉段階と推定されている。第2号古墳との間に設定したT3-3における土層観察では、中世山城に伴う堀切が認められたため、その切り合い関係については明らかにしえなかつた。そのことから、本古墳の築造時期は、とりあえず第2号古墳同様、5世紀中葉段階頃と推定しておきたい。いずれにしても、埋葬施設や副葬品の一部類似していることからいえば、その時間差はほとんどないものと考えられる。

そのほかの遺構

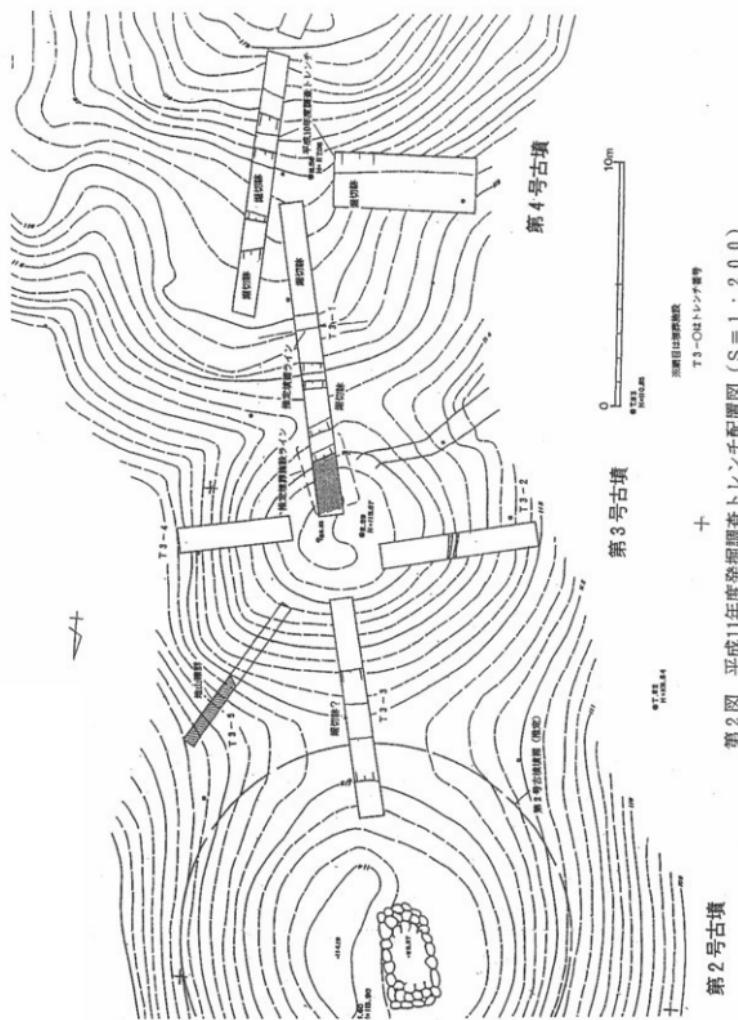
今回の確認調査では、古墳時代以外の時代の遺構も認められた。概要は以下のとおりである。

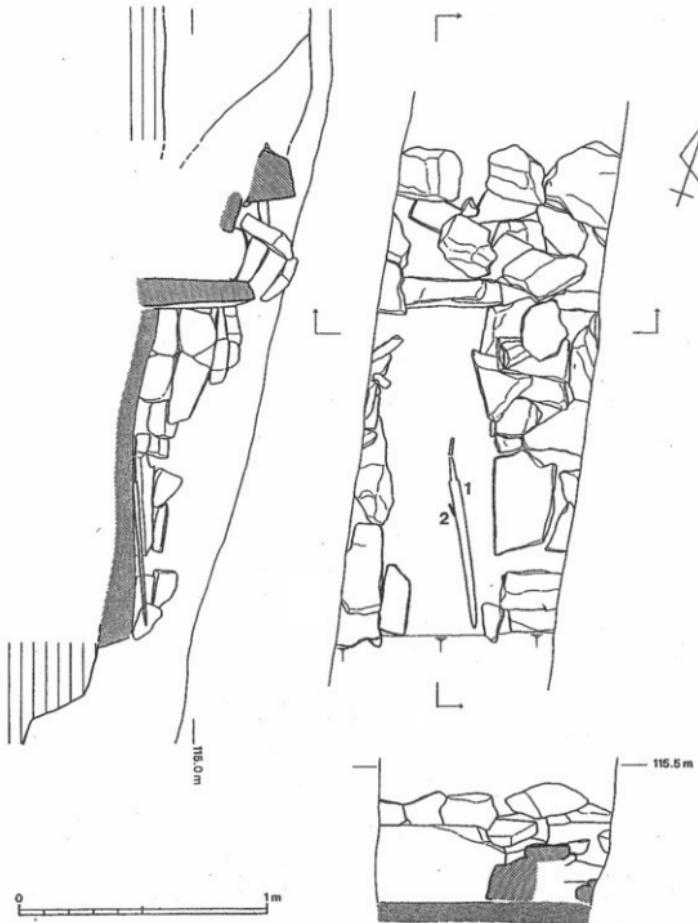
I 弥生時代

T3-4からは、地山面を約30cm掘り込んだ、幅約30cmの溝を伴う60cmの平坦面を確認した。これについては、埋土中から弥生土器が出土しており、墳丘築造前に造られた弥生時代の住居跡ないしはテラス状遺構の一部と考えられる。

II 中世

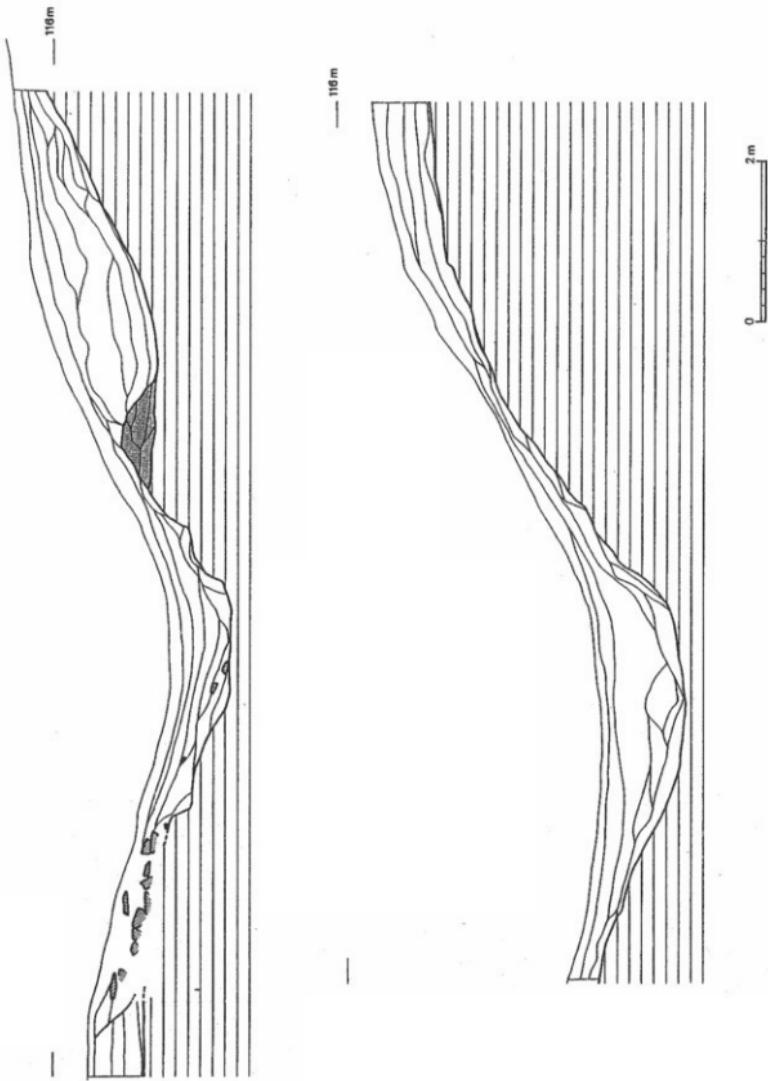
T3-1及びT3-3では、中世山城跡に関連する堀切跡が認められた。また当初第3号古墳墳頂部と考えられた箇所についても、地形の改変が認められるので、郭として使用された可能性が高い。なお、T3-1の堀切内埋土中から刀子（第5図12）が出土している。

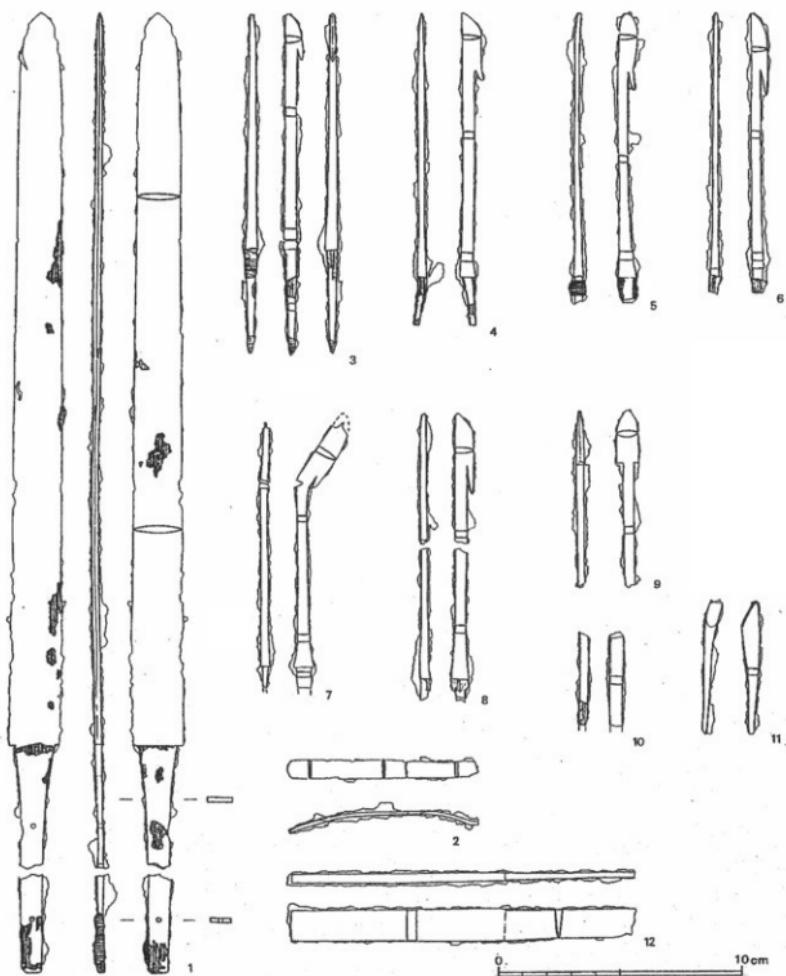




第3図 中小田第3号古墳埋葬施設実測図 (S = 1 : 20)

第4図 T 3 - 1, T 3 - 3 土層断面実測図 ($S = 1 : 60$)





第5図 平成11年度発掘調査出土遺物 (1 ; S = 1 : 4, その他 ; S = 1 : 2)

平成 12 年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査

1. 調査期間 平成 13 年 3 月 19 日（月）～平成 13 年 3 月 30 日（金）

2. 調査古墳 第 2 号古墳（第 2 図）

墳形に沿って、5 本のトレーニングを設定した。また、昭和 55 年に発行された発掘調査報告書（潮見浩編『中小田古墳群』広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室 1980 年）において指摘された、第 2 号古墳北側の平坦面が本古墳に伴うかどうかについても考慮にいたれた。なお、トレーニングの呼称については「T-○」とし、○に挿入する数字は通し番号とした。すなわち、今回のトレーニングについては、T 1～5 である。

3. 調査概要

第 2 号古墳（第 2 図）

I 墳形と規模

本古墳は、昭和 54 年の発掘調査における地形測量の結果、直径約 15m、高さ 2.5m と推定された。また、北側には「長さ・幅約 7m の三角形状のやや平坦面があり、ここに造り出しの存在する可能性」が想定されている（潮見浩編『前掲書』1980 年）。このため、墳形及び規模の確認を目的として、第 2 図のとおり合計 5 本のトレーニングを設定した。すなわち、T-1 は第 3 号古墳との前後関係をみるため昨年度調査したトレーニングを延長、かつ一部再発掘したものである。T-2 は南西方向の墳端を、T-3 は北西方向の墳端を、T-5 は西方向の墳端および、現地形で認められた墳丘頂部東側の高まり並びに埋葬主体である竪穴式石室の掘り方を、T-4 は前述した造り出しの存在の有無を、それぞれ確認する目的で設定した。

発掘調査の結果、いずれのトレーニングにおいても中世段階の山城築造に伴う地形改変が認められた。T-1 では堀切と郭二ヶ所が認められた。しかし、堀切については、その埋土と考えられる、にぶい黄褐色砂質土（第 3 図上段網目箇所）が地山面まで達しておらず、それ以下の堆積土については古墳時代における溝の埋土の可能性があることから、ここで確認された地山の最深部が第 2 号古墳の墳端と推定される。また、T-2 においても郭二ヶ所が確認され、その埋土には堀切の埋土と同様ににぶい黄褐色砂質土が堆積していた。この堆積土についても一部地山面まで達していない箇所があり、古墳時代における遺構面が残存している可能性があると考えた。その他のトレーニングでは、明確な本古墳に伴う遺構面が遺存している状況ではなかった。そのため、二箇所のトレーニングからの情報でしかないが、第 2 号古墳の墳形は円形で、地山の削り出しと盛土によって構築されていると推定される。蓋石などの外表施設は本来から存在していなかった可能性が高い。また、規模については、東西方向の規模は未確定であるが、直径 20m 程度と考えられる。高さは、南側に設定した T-1 において現状で約 1.9m であるが、墳頂部については、T-5 の調査状況によれば、既に「蓋石や側壁上端の一部は失われてい」と指摘されたとおり（潮見浩編『前掲書』1980 年）、削平は石室直上まで及んでいることが認められた。このことからすれば、古墳築造当時は 2.5m 程度であったと推定される。本古墳に伴う遺物については T-5 から鉄器片が出土したのみである。T-4 及び T-5 から、管玉がそれぞれ 1 点づつ出土しているが、いずれも後世の堆積土中からの出土であり、本古墳に伴う可能性が少

ない。なお、築造時期については、前回の埋葬主体の発掘調査で、出土した遺物群から5世紀前葉頃と考えられている。

出土遺物

管玉（第5図1、2）

1はT-5、2はT-4から出土した。いずれも後世の堆積土中からの出土で、本古墳に伴うものかどうかは不明である。1は碧玉製で、長さ1.7cm、直径0.65cmで、両側穿孔である。2は赤石英製で、長さ1.4cm、直径0.35cmで、両側穿孔である。

鉄製品（第5図3、4）

いずれもT-5からの出土で、中世以降の再堆積土中からのものである。小片のため器種は不明であるが、4は刀子の基部と考えられ、5についても刀子の可能性がある。

第14号古墳（第4図）

ところで、第2号古墳における造り出しの存在の有無を確認する目的で設定したT-4では、先述したとおり丘陵斜面に郭が二箇所と北側に存在する平坦面との傾斜変換点付近に堀切が掘り込まれていた。そして、その堀切の北側には長軸を東西方向とする竪穴式石室と考えられる埋葬施設が確認された。この北側の平坦面は、土層観察、蓋石が表土直下に検出されたこと、そして蓋石直上から釘が出土したことなどから、中世段階に蓋石直上まで削平を受けたことが認められた。

この埋葬施設については、東側にトレーナーを拡張したところ、蓋石直近の掘り方埋土中から鎌が出土した。その形態的特徴などから見て、この鎌については古墳時代の所産と考えられることから、この埋葬施設を第14号古墳とした。

この第14号古墳は全掘していないため、本古墳の全体の範囲は不明である。しかも、中世段階においての削平や、堀切掘削により、溝などについて確認はできなかった。一方、石室の規模については幅約1.5m、長さはピンボールによるボーリング調査の結果から約4m程度と推定される。掘り方は、南側の箇所のみ地山から掘り込まれたもので、その他の箇所では、盛土中から掘り込まれていた。石室の構築土はこれらの周辺の盛土とほぼ同色、すなわち同じ質感の堆積土であったため見分けにくかったが、わずかに掘り方内の埋土は白っぽかった。これによって分層した結果、長さは未掘のため不明であるが、幅については約2.9mである。その場合、北側及び東側は掘り方と石室には大きく空間ができることがある。この第14号古墳の築造時期であるが、この石室蓋石直上や周辺から、土師器が出土しているが、小片のため時期を決定できていないが、鉄鎌は曲刃形式であることから、5世紀代と考えられる。

出土遺物

鉄鎌（第5図5）

第14号古墳の石室蓋石直近から出土した。いわゆる曲刃鎌である。刃先を左に向けた場合、手前側に折り返しがくる。基部には柄と考えられる木質が遺存していた。長さは16.7cm、刃の長さは13.3cm、刃幅は最大2.5cm、基部幅は3.1cmである。重量は69.9gである。

その他の遺構

先述のとおり、中世段階の山城築造に伴う地形の改変が認められた。T-1では堀切と郭状の平坦面が一箇所、T-2では郭状の平坦面を2箇所、T-3では郭状の平坦面を2箇所、T-4では郭2箇所と堀切を確認した。T-5では第2号古墳の墳頂部を郭として地形を改変するための墳丘を削平した痕跡を確認した。また、その他に、地形観察によれば、西側斜面などに堅壠の痕跡が認められた。この山城跡に伴う遺物としては、T-1の堀切埋土中から青磁の破片が出土したほか、T-2の堆積土中やT-4の中世段階以降の堆積土中から、釘が出土している。

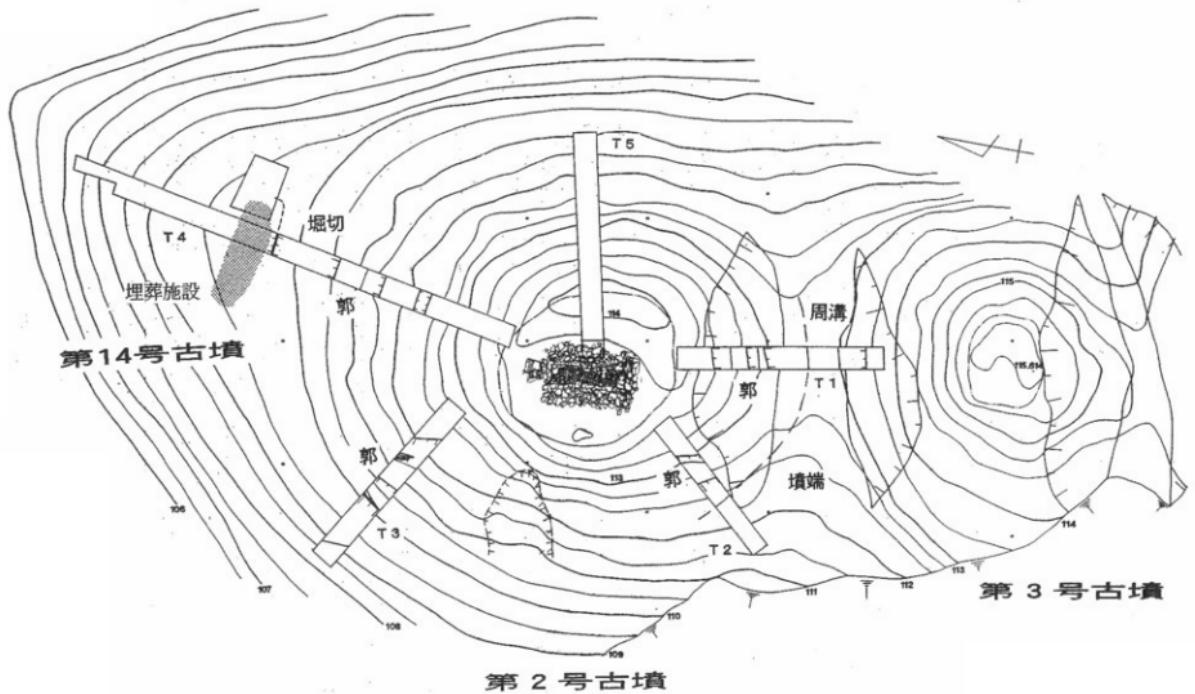
出土遺物

青磁（第5図6）

T-1の中世段階の堀切跡埋土中、土層内から出土した。碗形土器の口縁部の破片である。復元口径は約15.2cmである。

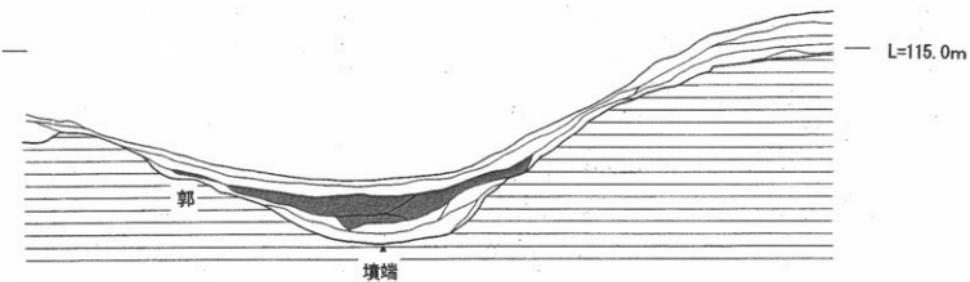
鉄釘（第5図7～27）

T-2の堆積土中やT-4の中世段階以降の堆積土中から出土した。少なくとも50点以上出土しているが、ここでは遺存状況の良い一部を図示した。T-2出土のものは長さ7～8cmのもので、重さは6.6g～19.5gである。T-4出土のものは長さ3.5cm～4.0cmのものが大半で、重さも1.3g～3.1gの範囲内で収まる。

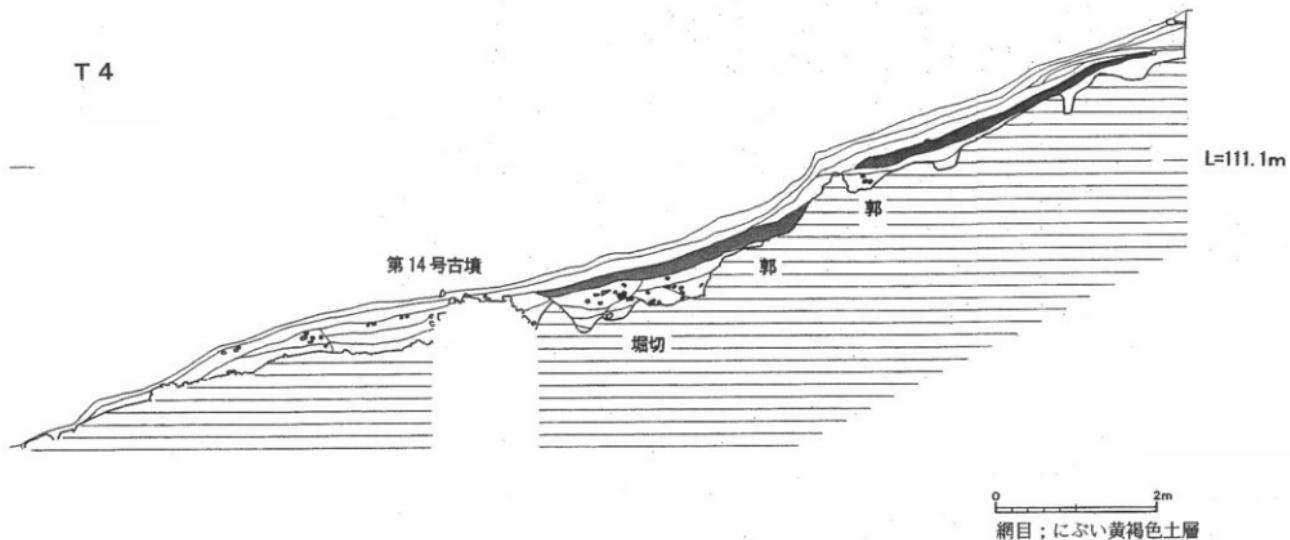


第2図 平成12年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査トレーニチ配置図 ($S = 1 : 200$)

T 1

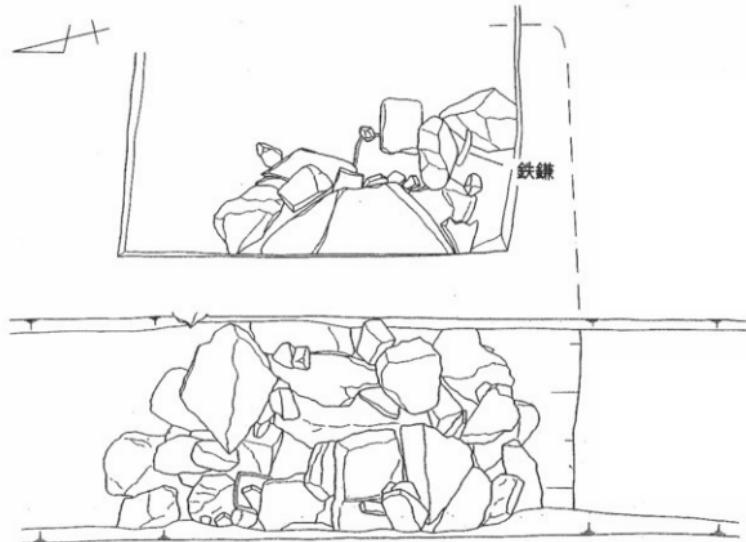


T 4

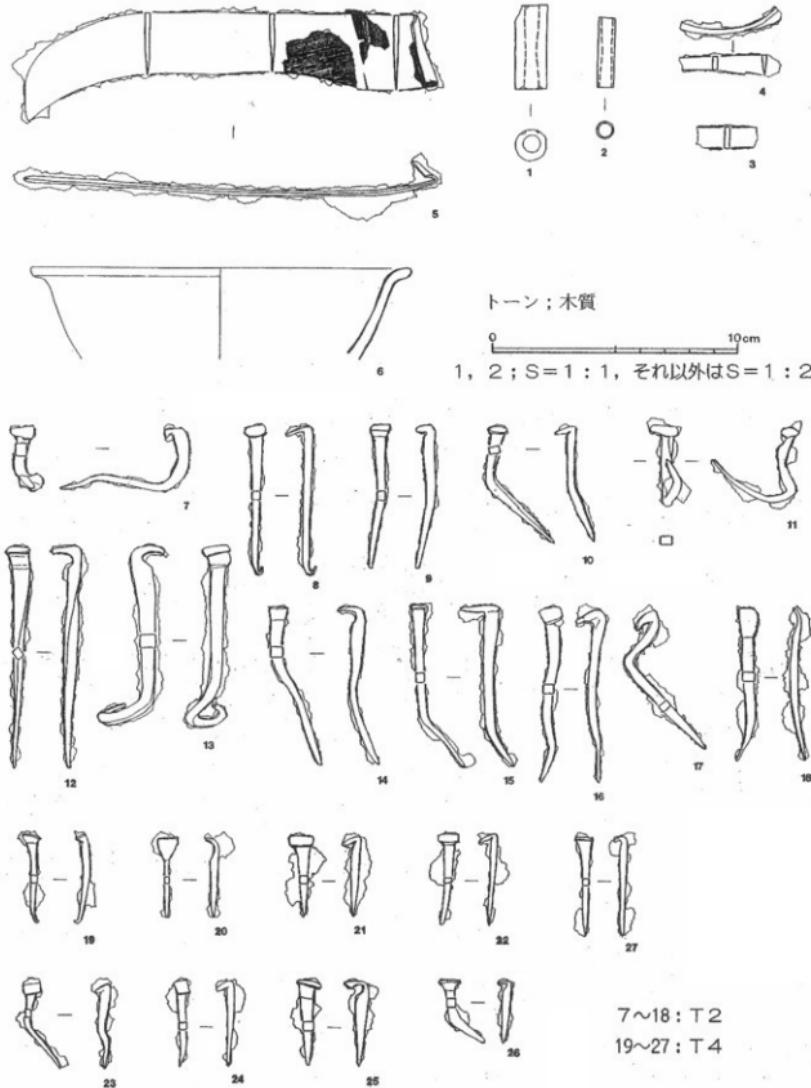


第3図 平成12年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査T 1・T 4 トレンチ土層断面図 (S = 1 : 60)

網目：にぶい黄褐色土層



第4図 第14号古墳埋葬施設実測図 ($S = 1 : 20$)



第5図 平成12年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査出土遺物実測図

平成 13 年度史跡中小田古墳群遺構状況確認調査

1. 調査期間 平成 14 年 2 月 25 日（月）～平成 14 年 3 月 28 日（木）

2. 調査古墳 第 1 号古墳（第 2 図）

昭和 54 年度の発掘調査では推定の域を出なかった前方後円墳という墳形について明らかにする目的で、くびれ部を中心に前方部と考えられている箇所に 6 本のトレンチを設定した。なお、その設定には推定前方部の北端に立地する第 9 号古墳との関係も考慮に入れた。そのうち 5 本は昭和 54 年当時広島市教育委員会と広島大学文学部考古学研究室によって発掘調査されたトレンチ箇所を拡張したが、1 本は新たに設置したものである。ところで、トレンチの呼称については「T-○」とし、○に挿入する数字は通し番号とした。すなわち、今回のトレンチについては、T-1～6 である。

3. 調査概要

I 墳形と規模

本古墳は、昭和 54 年の発掘調査（トレンチ調査）の結果、「円丘部とそれに続く北東側傾斜地では上面と側面を削平した地山整形が認められ、裾に平坦面をめぐらすことが確認された」ため、全長約 30m、後円部径約 20m、高さ 4 m 前後の前方後円墳であった可能性が強いとされている（潮見浩編『中小田古墳群』広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室 1980 年）。今回の調査の目的は、明確にくびれ部及び前方部を確認することにあった。

調査の結果、推定くびれ部に設定した T-1・T-2において、墳丘裾を確認し、それにつづく地山整形によって造り出された平坦面を確認することができた。これによって、後円部と前方部との境界には明確にくびれ部を認めることができた。また、このトレンチの北側に設置した T-3においても、墳丘からの傾斜変換点と地山整形された平坦面が認められた。これによって、本古墳が前方後円墳であることが確認できた。しかしながら、前方部北側、すなわち本古墳の北側に接して築造された第 9 号古墳側に設定した T-4・T-5においては、第 9 号古墳に伴う周溝が確認されたため、第 1 号古墳北端については押さえられていない。前方部墳頂部に設置した T-6においても、同様に周溝が認められたため、北側の墳端は確認できなかった。

本古墳の規模について、東半部については実施していないため推定の域を出ないが、幅については、くびれ部で約 12m である。長さについては上記の理由により、北端が第 9 号古墳に伴う周溝により切られていることから、今回の調査では明確にできなかった。

古墳に伴う遺物については、土器が出土しているものの、細片のため、器種・時期などについては明確にできていない。

ところで、今回の確認調査では、T-4、T-5、T-6において、第 9 号古墳に伴うと考えられる周溝を確認し、また、T-4・T-5において、それぞれ地山の傾斜変換点およびそれに伴うと考えられる平坦面を確認した。それによって、第 9 号古墳の規模・墳形について明らかにすることができた。すなわち、規模が南北約 5 m、東西約 10 m の楕円形を呈するものと考えられる。T-5 の土

層観察によれば、第1号古墳側の墳丘を削り込んで周溝が掘削されていることが確認された。このことから、第9号古墳は第1号古墳よりも新しい時期の築造ということがいえる。このことは昭和54年度発掘調査における本古墳出土遺物から推定される時期と齟齬をきたすものではない。

なお、今回の確認調査においては、本古墳に伴う遺物は出土していない。

II その他の遺構

第1号古墳前方部における墳頂に設定したT-6と、墳丘斜面側に設定したT-2の頂部側において、土壙墓と推定される長方形の掘り込みを3基確認した。そのうちの1基は小口部に木棺を固定する溝を穿つものである。規模については、明確にできた2基についてはいずれも長さ約2m、幅は約1m程度のものである。これらは、確認された位置などの状況から、本古墳に伴うと考えるよりも築造前に構築されたものと考えたい。

そのほか、小口部に溝を有する土壙墓の東側に、西側に段を持つ二段掘りの掘り込みを確認した。しかし、これについては、その西側にはT-2で確認した別の土壙墓が存在しているので、溝のようなく延びるものと考えるよりも土壙墓のようなものを想定できるが、現段階ではその性格については明確にできなかった。

なお、これらの遺構からの出土遺物はない。